天理教教理における海外伝道について（3）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
ジュニア・フェロー
山西　弘朗　*Hiroaki Yamanishi*

「おさしづ」における海外伝道について

台湾へ渡った山名大教会初代会長諸井国三郎は、布教と同時に、その活動を支える殖産興業を軌道に乗せようと東奔西走したが、無理がたたって半年ほどで体調を崩して、帰国を余儀なくされる。命捨ててもという心定めをした国三郎にとって、どれほど辛く悔しかったことであろうか。また自分とともに台湾へ渡ったにもかかわらず、後に残すこととなる他の布教師たちに、理の親として、どれほど申し訳なく思ったことだろうか。国三郎は帰国後、このことについて「おさしづ」を伺っている。

> 遠く所の事情、なか〳〵大層であろ。大層は大層だけの理は日々に受け取る。ほんの掛かり道の掛かりの思やんをしてみよ。世界は一寸々々の理は治まりてある。なれど、遠く所、一寸掛かり、めん〳〵元々道の掛かり、一つ定めた心の理さえ変わらさんなら、どんな事情も治まる。遠く所は暇が要るようで早い。どういうものなら、よく聞き分け。世界には大抵々々道のにをいともいう。これまでの年限を思えば、これからどれだけの道を通らんならんやと思う。これからは早いで。一代の心ではいかん。末代までの理。先々道の理がどれだけに成ろうとも、元々最初掛かりという理は、なか〳〵の理である程に。後か先かの理を聞き分けるなら、軽いものやあろまい。些かのものやあろうまい。どんな事でも及ばすで〳〵。身上の処案じる事要らん。皆んなそれ〳〵だん〳〵一つの理に添うて、成程と身心に理が治まれば、さあ、これから道は幾筋付けるとも分からんで。（明治31［1898］年3月16日）

また、この「おさしづ」の後に「元の働きが大きいか、先の働きが大きいか、よう思案せよ」とのお言葉が添えられたという。この「おさしづ」の大意は次の通りである。

海外という遠い所で、国内と異なる苦労を重ねて運んだ真実は、その苦労しただけ日々にしっかりと受け取ってもらえる。それぞれが、一つの心を定めて、その心の理が変わらなければ万事治まってくる。海外という事情の異なる遠い所で、最初の道をつけるのは非常に難しいことであるが、一度道をつければ、あとはどんどんと広まっていくから、決して自分一代でどうなるかというような心で考えてはいけない。最初の道がこれからどれほど広がっていくかは想像もできない。

このように、末永く先を楽しむという親心溢れる労（ねぎら）いのお言葉であった。

この言葉に国三郎はどれほど救われただろうか。また海外伝道に込められた親神の深遠な神意に深く納得したことだろう。事実、この後国三郎によって始めかけられた道が、台湾において大きく花開いていくことになるのである。

海外伝道と植民地台湾

ここまで、「おさしづ」における海外伝道について紹介してきたが、当時の台湾は海外とは言え、日本の植民地であった。明治28（1895）年、台湾は日清戦争によって結ばれた下関条約に基づき清から日本に割譲され、新しい領土となった。日本にとって初めての植民地である。植民する側（宗主国）と植民される側（植民地）とに世界が二分されていく国際情勢の中で、日本もまた宗主国の仲間入りを果たすこととなった。台湾統治を担う行政機関として台湾総督府を設置し、日本の領土として統治を進めた。統治権力の中心はあくまで日本人によって掌握され、日本本土の利益を優先したさまざまな統治政策は、たとえ歴史的に他の西欧の植民地統治の手法と比較すれば人道的であったと評価されるとしても、台湾の人々から見れば日本人中心の植民地統治にほかならなかった。こうした歴史的社会的状況は、現代における海外伝道とは大きく異なるものである。

諸井国三郎が台湾伝道を計画したのは、言うまでもなく台湾の人々に天理教の教えを広めたいという強い使命感と信仰心によるものであった。しかし、それと同時に、当時日本に割譲されて間もない台湾で殖産興業に従事しながら経済的基盤を築くことによって、布教活動の維持・運営につながると見込んだためであった。新しい領土となった台湾で布教活動を開始した動機や布教方法を理解するためには、その背景にも注目する必要がある。たとえば、当時の天理教青年の台湾伝道への眼差しを示すものとして、南海大教会の山田敬誠の手紙が残されている。この手紙は、南海大教会初代会長に台湾伝道の熱い思いを伝えたものである。

> 今や台湾もいよ〳〵吾版籍ニ加はり候　付而ハ早く吾本教を以て彼之残忍酷薄之風を改良し大日本帝国之人民として耻かしからざる様感化せしむるハ吾人神道家之責任ニ有之候　乍併世界的神道を以てすと雖も容易ニ感化せしむる事能はざるハ勿論之事ニ御座候　而して今其任ニ当る者ハ吾天理教師こそハ斯道教師之熟知する処ニ御座候得ば兼て渡湾せんとの精神平生脳漿を離れざる事と吾偏（吾儕）竊かニ推察せられ候　況んや既ニ自身（自由に）航海も出来得る事ニ御座候　於是余之渡湾せんとする之熱度頓ニ昇るを覚え候（明治29［1896］年1月13日）[1]

当時、敬誠は鹿児島、宮崎両県にわたって布教活動に従事していたが、後事は他の布教師に任せて、自らは台湾布教に乗り出すべく、この手紙を書いた。この手紙には、天理教の教えが伝わっていない台湾で布教をしたいという信仰者としての使命感と共に、新領土となった台湾で現地の人々に天理教を布教することで日本人へと教化しなければならないという宗主国の国民としての眼差しとが如実に表れている。

ちなみに、敬誠を中心とした南海大教会の台湾布教の計画は、のちに布教費用の調達が難しいことが判明して中止となり、敬誠自身も土佐タツノとの結婚により撫養大教会長となった。しかし、彼の台湾布教の意志を受け継ぐべく、浦中由之助や東静左衛門が台湾へ渡って布教に従事し、大正10（1921）年10月27日に南海大教会の海外教会第1号として新竹宣教所が設置された。さらに、翌年には台北に台州宣教所、ついで昭和2（1927）年に嘉義に新玉布教所、台南市に南州布教所が次々に設置されていった。南海大教会の海外伝道の道は台湾から始まったのである。

［註］

（1）『南海大教会史』第二巻（1971年）、747頁。